

「戦後文学」雑感

—小説のテーマと時代との関わり—

井 出 賢 次

日本の近代文学は、明治維新以来、わが国の近代化の流れと歩調を合わせて歩んできた。西欧諸国の小説の成果を取り入れながら展開してきた日本の近代小説の歴史も百三十年、節目ともいえる昭和二十年八月の第二次大戦の終結から数えても、今年（平成七年）は丁度五十年、半世紀が過ぎようとしている。

その終戦を境として日本の近代小説も大きな変容を遂げている。「小説は社会の鏡である」と言われているが、確かに小説は常に作品の書かれた時代の社会生活や、人間の生き方、考え方等、時代の思潮と密接な関わりをもちながら創られてきた。

戦後五十年の節目に当たり、今年は戦争を見つめ、見直す行事が日本各地で行われ、戦争への反省、戦争のもたらす悲劇、戦時下の悲惨な体験記の発表等、さまざまな視点から考察がなされてきた。特に体験記や体験談は直接に戦争を体験したものが語る以外に、戦争を、戦時下における人間の生きざまを証明するものがなくなってしまうという危機感を、忘れられようとしている戦争の実態を語り伝え、後の世に残そうとする試みでもあった。それは戦後五十年、戦争を知らない世代が増え、体験者は老令化して風化してゆく戦争そのものに対する総括であったとも言える。

九月二十日に本学国語国文学会主催の講演会が行われ、「詩を作ること、詩を読むこと」と題して、詩人であり、評論家でもある大岡信先生が講演された。そのお話の中で、中学三年の時戦争が終り、敗戦の日、目の前に真つ青な空があった。これで死ななくてもよいと解放された思いで詩を作りはじめ、以来、五十年間一つの穴を掘ってきたと前置きされて、自他の詩を中心に内面の真実を見つめることが大切であり、若い時に取り組んだことは五十年後に生きるなどと語られた。

また、大学在学中から小説を書き「飼育」で芥川賞をとる、今回ノーベル文学賞を受賞された大江健三郎氏は、九月十四日、松本市で「この五十年と私の文学」と題しての講演会で「時代が作家に主題を与える」との趣旨のもとに講演された。「戦後の解放感(民主主義)、広島原爆と核兵器、障害のある子ども(障害をもつ長男光さん)」という自身の文学のテーマの移り変わりについて述べ、小説家は個人的なこと、自分のことを書くが、それでいて時代を表現するものを作る職業だと語り、時代思潮と小説作品の関わりの深さを強調された。

両氏の講演で共通するのは、敗戦後の解放感、自由、民主主義を謳歌する戦後の時代を出発点として文学の道をスタートしている点である。一つの大きな変わり目の時代の息吹きを吸いこみ、前向きに新しい時代の思潮を受けとめ、そこから文学活動が始まっている。明けてゆく輝かしい時期、人間の尊厳や自我の解放、個性の尊重される解放感に満ちた時期に青春時代を送り、そこを基盤に作家活動に入るのであり、そのことが両氏の作品のテーマを形成しているのである。

私的なことになるが、両氏よりも少し年輩の私の場合は、一年間の軍隊経験もあり、日夜、死と直面していた折に終戦を迎えたため、解放感よりは挫折感、虚脱感、無力感に襲われ、百八十度転換する思潮の中で、当分の間は放心状態の日々が続き、虚無的な思いで過ごしていた。急変期には僅か数年の隔たりが、物の見方や考え方を大きく左右することを考えさせられた二つの講演であった。

文学作品が「時代が作家に主題を与える」という観点から考えると、戦争を直接体験した作家としなかった作家との間に作品の上で大きな差があるといえる。

戦後に描かれた戦争に関わる小説には、作家が自ら体験した生々しい真実、それぞれの場面でのぎりぎりの局限状況における人間の心理や行動、戦争が人間に与える心の傷等、人間の存在の本質をえぐり、人間の生き方を考えさせられる作品が多い。戦争という局限下の状況の中で、人間がいかにか悩み、考え、生きてきたかを小説という作品の世界で問いかけてくる。作家が、自分の生きた時代を真摯に見つめ、人間のありようをきびしく描き出している。

五十年という節目の年に戦後に書かれた小説をいくつか読み返す機会をもち、改めて考えさせられることが多かった。あれから半世紀、若い諸君にとっては遠い昔の小説となつて、既に読まれなくなつた作品も多くなつてゐる。

近代国文学を受講している学生から「現代小説では何を讀んだらよいか。誰のものを讀んだらよいか」と時折質問されることがある。その都度、一般的に評価の高い作品やその学生にふさわしい作品を紹介してきた。たまたま戦後五十年ということもあり、戦中戦後に青少年期を過ごした一読者の立場から、戦後の文学について、時代が作家の経

験した世界がどうテーマに影響を与えているかを中心に考えてみたい。主として昭和二十年代、三十年代の個々の作品を通して探ってみることにする。

戦時体験

戦後の小説について述べる前に、私の個人的な戦時中の体験（後出の「帰らざる夏」加賀乙彦 同年代、同じような軍隊経験者）に触れておきたい。

私が少年時代に体験した戦争は小学校二年の時の支那事変にはじまる。成人に達した男性の多くは兵士として、或いは学徒出陣などで否応なく外地の直接的な戦場に従軍させられ、或いは国内でもきびしい軍規の中での訓練生活を送っており、または軍属や義勇兵として殖民地政策にのつて多くの人々が中国はじめ各地に派遣された。子ども達も少国民の名の下に徹底した軍国主義の教育がなされていた。

戦争が激化するにつれ、中学生は軍需工場に動員され、女学生は学校工場での作業など、すべてが戦時体制下に組こまれ、落ち着いて学習する状況にはなかった。昭和十九

年、私は十五才で甲種飛行予科練習生として土浦海軍航空隊に入隊、一年間殉国の精神を鍛えこまれ、死ぬことが悠久の大義に生きる唯一の道として教えられ、特攻隊の一員として散華することが生き甲斐といった厳しい訓練に明け暮れしていたのである。一方、航空隊は勿論、大都市を中心に米軍の爆弾の雨で焼き尽くされ、非戦闘員までもが災禍に巻き込まれ、悲惨な生活を余儀なくされていた。

当時の国民が体験した戦争は、それぞれ置かれた位置、年令、性別、職業、住んでいた地域等によって、極度に多様化されていた。いずれにしても、国民すべてが苛酷な状況の中で生きていたのである。これらを伝える文字が、まさに「時代が作家にテーマを与える」という言葉通りに、個々の作家の多様な戦争体験を踏まえて創られてきたのが戦争文学である。

昭和二十年に終わった第二次大戦は、従来の富国強兵、先進国に追いつき追いこせ、個人の尊厳よりも国家への忠誠といった国家社会の概念を根本から覆がえたのである。平和な自由な、個人の人權が認められる民主的な新しい価値観や考え方による国造りが始まったのである。

新たな文学の出発

国家の、軍の統制下にあった文学も息を吹き返した。新しい思潮の中で、戦時中の体験を踏まえ、或いは新しい理念で、時代にふさわしい文学が創り出されたのである。

戦後、いち早く復活したジャーナリズムに迎えられたのは、永井荷風、谷崎潤一郎らの大家であった。またプロレタリア文学系の文学者たちも、新たな民主主義文学運動を開始し、「近代文学」同人の手によって、近代的自我の確立と文学の自立を目ざして新たな活動を開始した。さらに戦争の終結は、野間宏、梅崎春生、椎名麟三、中村真一郎等の多数の新人を輩出させるきっかけともなった。少し遅れて大岡昇平、堀田善衛、安部公房、武田泰淳らが登場し、自己の戦中体験を基盤において、人間の尊厳と悲惨さを描き出している。ある者は自己が置かれた位置と強烈な戦中体験との相克を描き出している。

ついで第三の新人と呼ばれる安岡章太郎、吉行淳之介、遠藤周作、曾野綾子、阿川弘之らは彼らの青春と戦争との関わりがあまりに密接なために、ためらいながら、その問

題を提起している。

戦後の昭和二十年代はまさに百花繚乱たる状態が現出した時代とも言える。右にあげた作家のほかにも既成の作家や多くの新人が、さまざまな人生体験を反映して創り出した戦後の多彩な小説は、新しい時代を告げる夜明けであった。

戦後の文学全般については、その多様性ゆえに、すべてを論ずることはできないが、戦後に創作活動に入り、何らかの意味で戦争に関連あるテーマを追求した作家の作品の中から数編を選び、時代が作品にどう影響を与えているかを中心に読み手の立場から考えていくことにする。

局限状況に追い込まれた人間の心理と行動

「俘虜記」大岡昇平を中心に

大岡昇平は戦後「俘虜記」で作家としてデビューし、続いて「武蔵野夫人」「野火」等の代表作ともいえる小説を昭和二十年代に次々に発表した。

「僕の文学的青春は、昭和三年二月、小林秀雄に合った

時から始まります」(文学的青春)と自ら書いているように、旧制高等学校時代に小林秀雄にフランス語の手ほどきを受け、小林をとおして河上徹太郎、中原中也等の交流も生まれた。京大仏文科卒業後、スタンダールの研究や翻訳評論等の活動をしていたが、戦争末期の昭和十九年に三十五才の折、補充兵として召集され、一兵卒としてフィリピン

の戦闘に従軍、翌二十年俘虜となりレイテ島で収容所生活を送り、敗戦後に帰国、生死の境を体験し、生に根ざした小説を描くようになる。

二十三年に「俘虜記」「野火」などを発表、悲惨な苛酷な戦争の中で死を強いられた亡き戦友達への思いと、戦場という局限された中での人間の心理や行動等の交錯した世界を自らも一兵士であった立場から描いている。

戦争という非人間的な世界を彷徨した作者の直接体験が集約された「自分の事を書くが、それでいて時代を表現するものを作る」と言った大江氏の言葉がそのままあてはまる作品となっている。軍部を憎み、戦死者の鎮魂の思いが読む者の心に響いてくる。川上徹太郎が「彼の描きたかったのは戦争なんかでなく、ギリギリに剝奪されたこの人間

の姿である。この人間の誠実さが人の心を打つのだ」と述べているのもうなずける。

この作品は「私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の捕虜となった」との書き出しで始まる。なお冒頭に「わがこころのよくてこころさぬにはあらず」という歎異抄の一句がある。主人公の「私」は三十五才、三カ月の教育の後フィリピンのミンドロ島に送られた補充兵であり、日本の勝利を信じていなかった。部隊の大部分はマラリアにかかっており、私もそうであった。私は足手纏いになるので隊と別れ、死を覚悟して山中を彷徨する。疲労困憊の果てに一つの事件以外あらゆる記憶を抹殺してしまっている。

たしかなのは私が米兵が私の前に現はれたばあひを考へ、射つまいと思ったことである。私が今ここで一人の米兵を射つか射たないかは、僚友の運命にも私自身の運命にも何らの改変も加へはしない。ただ私に射たれた米兵の運命を変へるだけである。私は生涯の最後の時を人間の血でけがしたくないと思った。米兵が現はれる。われわれはたがひに銃を擬して立つ。彼はつひに私がいつ

までも射たないのにしびれを切らして射つ。……この状況はじつにあり得べからざるものであるが、その時の私の想像に浮かんだままに記しておく。私のこの最後の道義的決意も、人・に・知・ら・れ・た・い・といふ望みを隠していた。

私の決意は以外に早く試煉の機会を得た（新潮社版）至近距離で若い米兵を発見し、銃の安全装置を外していが射たなかった。米兵はやがてゆるやかに向きを変え、たちまち視野から消えた。若い兵士を至近距離に見るも射たなかった。この折の心理を射つまいという決意に始まり、明晰な文体で省察する。私は射たなかった原因を人類愛に求めず、その米兵に若さを認め、父親的な感情に求めながら結論を見出せない。同時に僚友の負担を増した苦い味を噛みしめる。戦場場面での心理を高い倫理を保ちながら、綺麗ごととして描かず、感傷にも堕さない強い意志と冷厳な観察は、以後の大岡の小説に一貫するもので、戦争文学（戦後文学といってもよい）の代表的な作品である。すぐれた反戦小説であり、同時に人間存在の根本を問う人肉を喰う世界を描き、戦争文学の最高峰の一つともいわれる「野火」とともに、戦争を考え、戦争を知る上の必読

の書といえる。なお、昭和四十年代にはこれらの作品の延長線上に「レイテ戦記」が書かれ、特攻隊の戦死者への熱い心情を基底に、戦争指導のあり方の因を求め、鎮魂であるとともに、国家と個人の問題を歴史の中で追求している。

心理分析を用い、知的な文体で戦後の社会に真実の「恋愛」を造型し、印刷事情のきびしかった時代に、当時の部数で六十万部といわれるベストセラーとなった「武蔵野夫人」も復員兵とその従姉妹の悲恋を軸に悲劇に終わる作品で戦後の人間の解放が語られている。

明治四十二年に生まれ、フランス文学に心酔していた作者が、三十五才で補充兵として召集され、日本の勝利を信じていなかったにもかかわらず、フィリピンで戦闘に従軍せざるを得なかった時代に、九死に一生を得た作者の体験が主題を支えている。しかも普遍的な戦争下における一人の人間のあり方をまざまざと描き、人間の生き方の典型を示す作品となっている。ギリギリの立場におかれた人間の姿が、読者に共感と感動を与えるのである。

「野火」と同様に人肉喰いを素材にした作品に武田泰淳

の「ひかりごけ」（昭和二十九年）がある。主人公の私は北海道羅臼にある海沿いの洞窟に「ひかりごけ」という淡い光を発する天然記念物を地元中学校長に案内され、それを見物し、そこで起こった人喰いの話を聞くことから始まる。莫然とした校長の話から、S青年の書いた「羅臼村郷土史」の「難破船人喰事件」を読み、より詳しい事情を知る。大東亜戦争の末期の昭和十九年の書き出しに始まる七人の乗った第五福神丸は厳冬の海で機関部の故障により難破、船長以下四名は意識を失いながらも岸にたどりつき、漁民の小屋に六十日間生活を送ることになる。最後の生存者は船長一人だけであった。保護された船長はやがてこのままでは自分も死ぬと思い、最後の死体を食べたことを告げる。しかし「羅臼村郷土史」には、さらに船長と西川（最後の一人）は、まず二人の船員の死体を食べ、船長は西川を殺して食べたとするS青年の推理小説的構想が、具体的根拠を示しながら付け加えられている。

以上の出来事を結末では二幕物の戯曲にまとめ、再構成している。第一幕では死体を食う話が書かれ、第二幕では法廷の場が描かれる。法廷の場では裁かれる船長だけでは

く、人の肉を食ったものには、首のうしろに光の輪が出る
と食われる人間が言ったその光が、裁判長以下全員に灯つ
てしまう結末で終わる。戦争のもたらした悪夢を戦後まで
ひきずって生きる世界を謎めいた形で描いている。この小
説では、生きるためというより、死ぬことはやさしいが日
本陸軍に必要な人間として任務や責任を果して御国のため
に尽くすために仲間の肉を食った船長の話となり、そうせ
ざる得ない状況に追いこんだ戦争、国家に対する作者の怒
りとも言える思いが読む者の胸に迫ってくる。

武田泰淳は明治四十五年生まれ。東大支那文学科に入学、
昭和十二年に召集を受け、十四年に除隊、昭和十九年に上
海に渡り終戦を迎える。そうした体験を経て小説家となり
「風媒花」「流人島にて」等を発表、作品の底に「諦念」「諸
行無常」などの仏教的世界観が流れている。

二人に共通するのは、三十才すぎに召集を受けた年代の
ゆえに、冷徹な眼で戦争を見つめ、戦争そのものの残酷さ
をえぐり出すとともに、ぎりぎりの立場に立たされた人間
の姿を描き出すことができた点であろう。

落暉よ碑銘をかざれ、学徒たちの悲劇

「雲の墓標」 阿川弘之を中心に

「おそらく大半の人が、この小説を泣かずに読みとおす
ことはできないだろう……死ぬことだけを目的に訓練され
ている異常な集団が、落ち着いた筆致で描かれているだけ
に、その異常さは一層強く胸にこたえた」(安岡章太郎)と
述べている。題名は文中の遺書に書かれた「雲こそ吾が墓
標、落暉よ碑銘をかざれ」からとられている。

阿川弘之は大正九年生まれ。東大国文科を昭和十七年に
繰り上げ卒業とともに第二期海軍予備学生として入隊、こ
の作品の主人公は作者よりは後期の十三、十四期の飛行予
備学生たちである。戦争末期、邪道ともいうべき「特別攻
撃隊」という、自らの生命を捨てて敵艦に体当たりすると
いう世界でも例を見ない戦術がみ出された。軍部は海軍
固有の兵学校出身の軍人たちを残して、学生から転じたこ
の期の予備学生と更に若い予科練習生出身者を「決死の特
攻作戦」に集中的に投入したといわれている。

同じ特攻隊員として散華した先輩の多い飛行予科練習生

として訓練中に終戦を迎えた私にとっては発刊当時、身につまされる思いで作品を客観的に読むというより、涙を流しつつ読んだ記憶が今も鮮明に残っている。

昭和十八年十二月十二日の海軍予備学生「吉野次郎」の日記に始まり、昭和二十年七月九日の遺書で終わる。ほとんどが日記によって物語られていく戦争文学である。

京大国文科在学中に学徒出陣で海軍航空隊に入隊した「吉野」「藤倉」「鹿島」「坂井」の四人は、在学中に万葉集演習に参加し、友情をはぐくみ合った仲間であった。

藤倉と鹿島は海軍に対して反逆的で、坂井が最も素直で吉野はその中間にいる。吉野は学業への未練、父母への思慕が十重二十重になって自分を幾つにも引き裂かれながらも「自分たちにはもはや、なにものかを選ぶということとはできない。定められた運命の下に、自分を鍛えることだけがわれわれに残された道だ」と観念しつつ、自分で納得しうる主体性を確立しようと苦悶する。藤倉ははっきりと反軍的、反戦的で「この戦争に日本が勝てる素因というものは、すでに全くなくなっている。生還ののぞみは、私に、ほとんどゼロになりました」と恩師に手紙を書きおくり、

「私は自分だけの非常な手段を考えております」と自らの心中を吐露するが、飛行訓練中に事故死してしまう。昭和二十年七月九日、吉野は「二十五年の御慈愛深く深く感謝いたします」の遺書をしたため特攻出撃した。

この小説は昭和三十年に書かれているが、同じ年「太陽の季節」で昭和七年生まれの石原慎太郎が芥川賞を受賞している。戦後文学の世界と異質ともいえる戦争の傷跡とは全く無縁の作品を書き、自由と解放を謳歌する青春群像を描き出している。太陽族なる流行語も生まれ、若者に熱烈に支持され文学というより社会的な風潮として大きく取り扱われた。が、私には何となくしっくりしないものが残っている。

時代が作家にテーマを与えろという観点から考えれば、戦争を直接体験した世代と戦後に青春時代を過ごした人間との間に、かくも鮮やかな対比の読みとれる作品が生まれることになる。同じ年に書かれながら作家の生きた世界が作品の中にそのまま投影されている。重い主題を扱った阿川弘之のこの「雲の墓標」は一時のブームの中で消えることもなく、戦時中に生きた若き万葉学徒が複雑な思いの中

で国に殉ぜざるを得なかった世界を描き、今も読む人の心に深くしみ透る。

四十年近い歳月を経て、今じつくりと読みかえしても、戦争という時代の嵐の中に生き、自らの死をどう処してゆくかと悩みつつ、「日本は必ず負ける」と予言し、戦争を批判しながら、自らの生命を戦場に散華しなければならなかった若き学徒の生き方は、鎮魂の思いをこめて脳裏に焼きついている。

四人の万葉学徒の日記、手紙が交錯して、次第に「特攻」へと追いつめられていくのと同時に日本の敗戦への道が語られる。純粋な吉野、リベラルな藤倉らが国家権力の命ずるままに生命まで失ってゆく過程が、志賀直哉の最後の門下を自認する作者阿川弘之のリアリズム精神と暖かいヒューマンに溢れた詩情豊かな筆致で描写されている。

自らも海軍予備学生としての体験を持つ作者が、共通の体験をもとに、自らの意志とかわりなく国家の命令により特攻隊に編入されざるを得なかった若き学徒の心情を鮮明に描き出したのが「雲の墓標」である。

一方戦後、最も早い時期（昭和二十一年）に書かれた梅崎春生（大正四年生）の「桜島」は終戦ぎりぎりの時を生きたがらえた暗号兵士の物語である。「私とは何だろう。生まれてから三十年間、言わば私は、私というものを知らうとして生きてきた」というのが、死を眼前にしての主人公の感想である。東大卒業後、海軍に召集され、南九州で二等兵曹となったところで敗戦を迎えた作者の思いが、主人公の思いと重なっている。それは同時に当時の学徒兵たちの思いと共通するものがあつたと思われる。この主人公の生と死の境界についての考察とおし、終戦とともに生への回帰に喜びを押さえきれない青年を肯定的に描いている。

昭和四年生まれの加賀乙彦は指導者養成のための陸軍幼年学校に学び、敗戦により信じていたすべての価値が崩壊することを少年の日に体験、その後の人生に大きな影響を与えたと思われる。少し遅い作品であるが「帰らざる夏」（昭和四十八年）で、日本軍隊の中核を形成した陸軍幼年学校の終戦の歴史を鮮やかに描き出している。作者は「こ

これは天皇主義という時代の精神をもつとも忠実に、また極端に信じこんだ少年たちの友情と挫折と破滅の物語である」と述べている。主人公は十三才で陸軍幼年学校に入學し、生徒監から「人間はいつか死ぬ。大切なことは長く生きることじゃない。どうやって死ぬかだ。どうせ死ぬなら立派に死ぬことだ。全員の先頭に立って、陛下の御馬前で死ぬんだぞ。わかったか」と訓示されている。立場こそ違え、予科練にいた私の立場と全く同じ世界が展開する。しかもこの小説の悲劇は愚直なほどの純粹さをもつ主人公の切腹自殺で幕をおろす。

回帰の喜びに生きる「桜島」との大きな違いは、戦争をどの年代にどう体験したかの相違でもあろう。「桜島」に描かれる特攻隊員の姿には多少の違和感を覚える私も、同時に、同年令に近い者として同じような境遇の中で常に死を見つめていたゆえか「帰らざる夏」はほろ苦い思いとともに共感を覚えるものがある。

敗戦という歴史的な転換期の揺れ動く少年の心情が描き出され、作者が戦後三十年にして自らを客観視し得た作品である。戦争が純な少年達の心をいかに残酷な世界に追い

こんでいくことか。改めて戦争の悲惨さを語りかけてくれる。

青春を戦時中に送った作家たち

「焰の中」吉行淳之介を中心に

戦時中に青春時代を送った吉行淳之介は、第三の新人と呼ばれる作家の一人で、大正十三年生まれ。昭和十九年に召集令状を受けるが、気管支喘息と診断され、四日目に帰郷する。「驟雨」によって昭和二十九年に芥川賞を受賞している。

「焰の中」は五つの短編をまとめたもので、私小説的技法を用い、戦争末期の一年間が小説の舞台となり、時代を反映して性をおしてまさに戦時中の青春の名残りのようにゆがんだ愛が語られている。戦後の作家にとって戦争のただ中に青春を送らざるを得なかった体験は作品のテーマに色濃く影をおとしている。

「蘭草の匂い」は当時学生であった主人公が入営し、身体検査の結果、即日帰郷となる物語である。生きることが

兵隊になるということと同じと考えられているこの年代の主人公の自由が息苦しく描き出される。

「湖の宿」では、戦時下、二人の友人が湖畔に旅し、宿で何人かの学生と出会い、議論の中で「個人主義で結構だ」と言い放つが、「天皇陛下のお言葉が間違っていると言うのですか」という詰問のまえでは沈黙せざるを得ない逼塞された、戦争末期の閉鎖され、屈折した青春が描かれる。

題名となった「焰の中」は米軍の空襲下の女性に対する感情が描かれ、「廃墟と風」の中で進展する。主人公はある娘と半ば同棲のような生活を送るが、そこには肉体の快楽だけがあつて何らの恋愛感情もない、最も不幸な荒んだ青春が暗く描かれる。

最後の「華麗な夕暮」では、戦争が終わり主人公は「戦争の間は死ぬことばかり考えさせられてきた僕は、今度は生きることを考えなくてはならぬ時間の中に投げ出されてしまったのだ」というどうしようもない現実に襲われ、身動きのならない世界に立たされてしまう。

当時の青年の中では、吉行のように敗戦を「僕が抜き難い反感を持っていた相手の敗北」即ち軍人や軍国主義者の敗

北を考えていた青年は少数派であつたかも知れない。それだけに戦時下における作者の青春は暗くおどましいものであつたと思われる。

この時代に青春時代を過ごした人々は、戦争を信じたものの、迷いをもつたものの、反対であつたものの、そのいずれもが戦争の名のもとに暗い青春を余儀なくされた世代といえる。この時代に青春期を過ごした作家達の作品には吉行淳之介に限らず痛み傷ついた思いが、常に痕跡として残っているようである。特に吉行は「驟雨」以降、性をとおして人間存在の本質を問い続けているのも潜在意識として戦時における青春の暗い思いが強く影を落としているように思われる。

「砂の上の植物群」「星と月とは天の穴」「暗室」などから「夕暮れまで」までの作品に見られる中年の男性と若い女性との愛のあり方というよりは性を追求した文学のテーマは、戦時中に戦争や軍部に対する反対や反感の精神をもちながらも、どうするすべもなく、時局ゆえにゆがめられた青春を送らざるを得なかった影響が色濃く滲み出ている、作家の生きた時代と創られた作品とが密接に結びついてい

ることをうかがわせる。

「焰の中」がゆがんだ青春の愛の不毛を描いたとすれば、吉行より少し年輩の大正七年生まれの福永武彦の「草の花」(昭和二十九年)は、中村真一郎のことばを借りれば「愛の不可能性」を証明していることになる。

この小説の構想は「冬」(序)「春」(結)との間にはさまれた「第一の手紙、第二の手紙」からなっている。手紙の書き手の汐見は成功率の低い肺手術を希望し、自殺に近い死をとげる。二つの手紙は死を前にした彼が、美少年藤木への愛とその妹千枝子への愛。二つの愛の挫折を回顧したものである。手紙の筆者は二十四才という設定である。

第一の手紙は旧制高校生で、下級生の男に激しい愛を感じると同性愛が書かれる。「無垢の魂に誘われるこの思慕、愛するということの陶醉、意識の全領域を照らすこの明智」と愛の歓喜を述べ、純潔なものを発見して、それを愛であると観念する。純粹な精神的なエロスとして同性愛が捉えられている。

「第二の手紙」では、相手の死後にその妹との間に起きた愛を取り上げている。戦争の中で「僕の世界と外部の世

界は全く別のものだ」と考え、戦争を批判し反対する中で自分たち青年が死んでいくことにはたえられない。そのような絶望的な死を寸前にひかえた孤独の中で妹との愛に没入していく。しかし、個としての人間存在が本質的に孤独であることを知ってしまった人間は愛を求めながら空しく終わってしまう。

作者が大学生活を送った昭和十三年から十六年は戦争の渦中に巻き込まれる時代である。卒業後の徴兵を怖れて心臓神経症になり、以後もしばしば悩まされたという。戦争によってもたらされた死の恐怖と人間どうしの大量殺戮への戦慄は福永に深い傷を負わせずにはおかなかった。戦中派の運命は、そのまま作者の運命でもあり、「忘却の河」「海市」「死の島」など、彼の作中人物の多くが過去の戦争体験をひきずり、死につながる暗い意識を語る人間群として描かれている。

吉行も福永も青春を戦争の激化する中で過ごし、ともに兵役は免れながらも、非人間的な社会の中で体験した暗い思いは、戦争を批判し、反対していただけにより強くより深く自らの生きた時代との関連で、後々の作品の中に影を

おとすようになった。

結 び

作家が自分をとりまく時代思潮の中で、その時代をどう生き、悩みもがきながらどう考えていたのか、そしてそれをどう作品の中で表現しているのか。作家の個人的な思考や生き方が、客観的にその時代を反映し、自分のことを描きながらその時代を、そこに生きた人間を描き出している。

戦後文学の一つの特色は、戦争という苛酷な冷厳な時局の中に生まれ合わせ、戦争そのもののもつ非人間的な世界を描くにせよ、戦時下の息苦しい暗い雰囲気を描くにせよ、その奥には、すべてのその時代に生きざるを得なかった人間の暗い、苦い思いが潜んでいる。しかもその戦争をいつ体験したかによって大きく左右されている。自らを語り、人間の真実を追求しながら、時代はやはり作家に主題を与えているのである。

参考文献

- 『日本文学研究資料叢書』（有精堂）
- 大岡昇平 武田泰淳 吉行淳之介ほか
- 『日本文学全史』 6 現代（三好行雄）（学燈社）
- 『日本の名作・近代小説62篇』 小田切進（中公新書）
- 『近代の文学 II』 山田有策（学術図書出版）
- 『この百年の小説』 中村真一郎（新潮社）
- 『近代文学全集』 該当作家（新潮社）

ほか